

RAILWAY PHOTOGRAPHY & POETRY CONTEST 2025

鉄道写真詩コンテスト入賞作品集 写真と詩で伝える鉄道の魅力



国土交通省鉄道局長賞



JR御殿場線 御殿場・足柄間

「暑い夏に」 塩川里美（静岡県）

歴史上最高に暑い夏が来るらしいよ
山に行こうか
海に行こうか

君と一緒になら
僕史上最高にあつい夏になるよ
きっとね

鉄 博 賞



JR予讃線 宇和島駅

「あの子みたいになりたい」と
強く焦がれたことがある
東京 名古屋 新大阪
あの子はどこでも人気者

「あの子みたいになりたい」と
夢中でもがいたことがある
顔も塗装も雰囲気も
近付きたくて着飾った

そうして分かったことがある
「私はあの子になれない」と
けれど 気付いたこともある
「あの子も私になれない」と
私は私なのだから
ディーゼル仕掛けの命を燃やす
私は私なのだから
終着駅では笑つていて

「私は私」 草山歩（神奈川県）

鉄道写真詩とは

鉄道写真詩とは、「鉄道写真」に「詩」を組み合わせて鉄道の魅力や旅情を表現する芸術活動です。いつもの鉄道、旅先での鉄道、その時々にとらえた鉄道の表情とともに作者の心情が伝わってきます。

Japan Network for Sustainable Transport and Environment
一般社団法人交通環境整備ネットワーク ecotran JNSTE

米屋こうじ賞



希朝す 新空夜 夜さ星 夜銀列 風ひ駅
望露す しが明 のさひ 消色車 のと灯
満にき き染け あやと えの過 声りり
つ輝道 光まで ときつ る穂ぎ きりのホーム
き り が 摆
る 光
が 摆
る

すすき
の影
ドライ
トに映
る

「秋影の線路」 丸山かおる（埼玉県）

大井川鐵道 福用・大和田間

水無田気流賞



沈踏沈名霧空誰人過鉄そ列誰誰灯踏霧
黙切んもの気かの去のれ車ももり切は
をはでな奥だが気を匂では待渡はは記
守たいきにけい配呼いも来たら消夢憶
つだく声 がたはびが ななずえのを
て が 残よな戻 いい た境食
い つういす ま界べ
る てなの ま線る
い い に
る

「沈黙」 池田淳二（埼玉県）

東武日光線 東武動物公園・杉戸高野台間

国土交通省鉄道局後援 一般社団法人交通環境整備ネットワーク主催 鉄道写真詩コンテスト2025 ー写真と詩で伝える鉄道の魅力ー

協力:鉄道博物館・東武博物館・日本現代詩歌文学館

協賛: 旅の手帖 ・ 交通新聞社 ・ 関東交通印刷

鉄道×文学の新しい表現に挑戦! あなたの撮った鉄道写真にあなたの詩を添えて

「鉄道写真詩」は、「鉄道写真」に「詩」を組み合わせて鉄道の魅力やその旅情を表現する芸術活動です。

本コンテストは、その登竜門としての役割を担うもので2017年に第1回を開催し、今回で9回目となります。

作品募集:2025年7月1日～9月30日

審査委員(敬称略):五十嵐徹人(国土交通省鉄道局長)・石田 亨(鉄道博物館長)

米屋こうじ(鉄道写真家)・水無田気流(詩人・社会学者)

原 潔(一般社団法人交通環境整備ネットワーク代表理事)

多数のご応募をいただき、ありがとうございました。

本コンテストの作品及び過去の受賞作品は、ホームページでご覧いただけます。 <https://ecotran.or.jp/photo/2025/>



エコトラン賞

「線路で働く男たち」

小野凌輔(富山県)



あいの風とやま鉄道



近鉄 大和西大寺駅

エコトラン賞

「あみだくじ」 栗原正隆(大阪府)

進むべき道がわからない私
ゆく先見えず ひとり佇む

誰か教えてくれ
でも 誰もわからない

運を委ねる あみだくじ
すべてを得るか すべてを失うか

進むべき道を見失った私
不安と恐怖 ひとり固まる

誰か導いてくれ
でも 誰も頼れない

運を委ねる あみだくじ
天に昇るか 地獄に落ちるか

最後のボルトが締められる頃
遠くで汽笛が朝を呼び
消えゆく工具の音のあとには
光の帯より新たなときが刻まれる

火花が跳ねれば夜が割れる
錆びたレールに命を吹き込む
汗の塩が風に解けてゆく
星屑を照らす作業灯の下

大地の鼓動を手のひらで測り

継ぎ目なき軌道を夢見る
コンクリートの隙間から芽吹く
名もなき草のしたたかさよ

鉄の業火のともしびよ

エコトラン賞

「四葉のクローバー」 山形真司(兵庫県)

誰かが置いていった
四葉のクローバー

あなたの幸せは
途中下車したのかもしれない

ガターンゴトンガターンゴトン
次の幸せはどこに向かって

運ばれていくのだろうか

行き交う人はみな親し気だ
「東京はさみしい」
いつか君が別れ際につぶやいた言葉だ
静かに 雪が降る
街を眠らせ 雪が降る

君のいない東京に
雪が降る

最後のボルトが締められる頃
遠くで汽笛が朝を呼び
消えゆく工具の音のあとには
光の帯より新たなときが刻まれる



JR神戸線

エコトラン賞

「東京に雪が降る」 吉田信正(埼玉県)

雪が降る
喧騒を沈め 音を消す
穢れを清め 東京に雪が降る

行き交う人はみな親し気だ
「東京はさみしい」
いつか君が別れ際につぶやいた言葉だ
静かに 雪が降る
街を眠らせ 雪が降る

ヒューン。花火の色に染まりながら、
滑り込んできた電車にのせられて
歩き始める。

彼女の笑顔。
夜空を照らすまん丸い花火。
笑い声がホームから去る電車をみて言う。
「また来年も、見れるといいな。」



JR中央線 飯田橋・市ヶ谷間

エコトラン賞

「ひと夏の思い出」 小倉希一(埼玉県)

ドドーン。空が照らされる。
いつも違うホームの姿。
彼女の浴衣がほのかに染まる。

「撮れた?」と聞く君
「まあまあかな。」本当は自信作。
ドドーン。空が照らされる。
いつも違うホームの姿。
彼女の浴衣がほのかに染まる。

ヒューン。花火の色に染まりながら、
滑り込んできた電車にのせられて
歩き始める。

彼女の笑顔。
夜空を照らすまん丸い花火。
笑い声がホームから去る電車をみて言う。
「また来年も、見れるといいな。」



JR京浜東北線 赤羽・川口間

エコトラン賞

「風わたる。」 櫻井路子(東京都)



山形鉄道フラワー長井線 羽前成田駅



JR伯備線 備中川面・方谷間



JR飯田線 金野駅

多くの旅びとが荷物をおろし
軽くなつたころを吹き抜けていった
雜踏でふと頬を撫でる風に
あの時の匂いがした
そうだ。
旅に出よう。

憶えたての手順で慎重に、
肌色のクリームを塗つていく。
眠れないまま夜を明かしたことが
悟られないよう、目元にも気を配る。
眉を整え、頬に紅を挿すと、
顔にはわりと明かりが灯る。
扉を開けたら秋の風。

JR伯備線 備中川面・方谷間

エコトラン賞

「初化粧」 岡本由紀(東京都)

憶えたての手順で慎重に、
肌色のクリームを塗つていく。

眠れないまま夜を明かしたことが
悟られないよう、目元にも気を配る。

眉を整え、頬に紅を挿すと、
顔にはわりと明かりが灯る。

眉を整え、頬に紅を挿すと、
顔にはわりと明かりが灯る。

デイーゼルエンジンのアイドリングの音と
鳥のさえずりと
風に葉のそよぐ音と
聞こえるのはそれだけ
駅で列車を待つ人もいなければ
降りる人もいない
それでも列車は走る
雨の日も 風の日も

それを必要とする人のために
秘境駅とも言われる駅のホームに立ち
発車の時刻を待つ運転士の姿に
静かでありながら強い使命感を感じた

エコトラン賞

「使命」 三田村 裕(神奈川県)



◇ 米屋こうじ Yoneya Koji 鉄道写真家



今年9回目を迎えた本コンテストですが、初めて審査委員全員の票を得たのが、塩川里美さんの「暑い夏に」(国土交通省鉄道局長賞)。ダイヤモンド富士の瞬間的なタイミングで、御殿場線の列車がやって来る。奇跡にも見える写真ですが、地元の利を活かし、何度もチャレンジし得ることができた、努力の賜物ではないでしょうか。

壮大な写真ではありませんが、草山歩さんの「私は私」(鉄道博物館賞)は、鉄道の愛しさが伝わってくる作品です。ディーゼルカーの気持ちは詠んだ詩に、思わず感情移入してしまいます。

私が選んだ丸山かおるさんの「秋影の線路」は、暗闇のなかでの作画に苦労がしのばれる作品です。実際に列車が接近するまで不確定な状況のもと、的確なフレーミングと露出で情感のある一枚になっています。詩は語句の長さが揃えられて、テンポよく読むことができ、そよ吹く秋風のような心地よさを感じました。

写真撮影でフレーミングの基本に"引き算"という考え方があります。主題を明確にするために、不要なものは画面(フレーム)に入らないように撮影するものです。詩にも似たような要素があるのではないかでしょうか。カメラ・レンズで切り取るかわりに言葉で切り取って整理していくことで、伝えたいイメージが鑑賞者により伝わると思うのです。

今年も優秀な作品が数多く寄せられるなかで、詩においては全体的に「少し長いなあ」と感じられる作品が多かったという印象を受けました。写真において"引き算"で切り取るように、言葉を選んで整理してみてはいかがでしょうか?

講評

◇ 水無田氣流 Minashita Kiri 詩人・社会学者



今年で9回を迎える鉄道写真詩コンテストは、鉄道にまつわる記憶や思いを想起させる秀作が数多く寄せられました。旅の思い出、人生の一場面、そしてこれから起ることへのわくわくした気持ちなど、鉄道のある風景に重ねた作品の数々を拝見していると、この鉄道写真詩という表現ジャンル自体が年々成熟して来ているのを実感し、大変に嬉しく思いました。

今回私が選出させていただいた池田淳二さんの「沈黙」は、幻想的な霧の東武鉄道日光線の踏切の佇まいが静謐で、一連書きで

淡々と綴られた詩も写真の雰囲気とよく調和しています。連を分けることのないこのような詩は、いわば「息継ぎ」がないので一気に読み進められるのですが、一方で書かれているのは踏切が象徴する「境界」というのが印象的です。踏切が、現実と夢、過去と現在の境界としても二重写しに描かれており、初行の「霧は記憶を食べる」や、中盤の詩調が転換してすぐに「鉄の匂い」といった身体感覚的な描写が絶妙な効果をもたらしています。これらが、今はいない「何か」に向かってたしかな手触りを表現し、作品全体に命を吹き込んでいます。また写真自体の色調も抑え気味であるため、詩の余情を感じさせる相乗効果を生んでいます。

国土交通省鉄道局長賞となった塩川里美さんの「暑い夏に」も、短くて思い切りの良い、とても勢いの良い詩で、富士山、太陽、御殿場線の3点がぴったりはまった素晴らしい作品となっていました。

「詠み鉄」の皆さま、今年も誠にありがとうございました。来年も、みなさまの作品を楽しみにお待ちしております。